

■自然史の中の「黄巾の乱」「倭国大乱」

父の老後の楽しみは「歴史」のようで、中国の史書、古事記・日本書紀の読み込みを進めているらしい。小学校の高学年から中学生くらいまでは、光栄のPCゲーム『信長の野望』（1983年）や『三国志』（1985年）を父とやった覚えがあるから、歴史への興味はもともとあったのかもしれない。今は史書の全文検索もできるはずなので、狙いを絞った読み込みもできる。大学で教えていたという自然地理学の知識を生かして古代をみると、古代史をめぐる数々の論争に介入したくなるそうだ。

例えば、世界規模の火山爆発を念頭に置きながら史書にみられる異常気象や飢饉の記事に注目してゆくと、歴史書のなかの事件も自然現象の中での出来事として見えてくるといふ。その一つが、2世紀末～3世紀頃とされてきたニュージーランドのタウポ火山の噴火と、『三国志』が述べる「蒼天死し黄天立つ」（黄巾の乱）との対応関係である。

じつはこの噴火は、すでに「2世紀末～3世紀頃」などというざっくりしたものではなくなっているらしい。南極・北極の両極近くで採取された氷柱の成分を調べると、時代時代の地球の大気の様子分かる。特に火山の噴火はそこに劇的な変化をもたらすのでわかりやすい。そして測定技術は近年とみに向上し、年代特定の精密度があがっている。

近年の測定によると、タウポ火山の噴火は、 181 ± 2 年（北半球グリーンランドの氷床での測定）および180年代（南極ドームふじでの測定）と推測できる。グリーンランドと南極の両極の氷で噴火による大気の変化を観測できるということは、噴煙が成層圏中に拡散していたことの証左で、そうした大規模噴火は日照不足をもたらす、凶作を引き起こすほどのものであったと想像できる。その影響は数年に及ぶが、これを「黄巾の乱」が起こった年代にぴったり当てはめることができるのではないかというのである。

史書の読み込みによって、父は『後漢書』（『三国志』よりも後に成立）のなかから、この時期（後漢・靈帝時代の光和4～6年＝西暦181～183年）に、異常気象の記事（雨期の遅れ、大旱（ひどい日照り）、夏の降雹、河の氾濫や土石流、大寒波など）が集中的に記録されているのを見つけ出す。この時期の前後60年には異常気象の記述はみられず、史書の歴史観の中でも異常な時期として示されている。つまり、異常気象の記述があるのは、ピンポイントでこの数年だけだ。そして光和7年（＝西暦184年）の黄巾の乱の記述である。

氷柱による年代測定のほうはいまだなお数年の誤差を含んでいるが、それが数年以内となることで、年数に厳密な歴史書の記述と照らし合わせることができるようになり、さらに年代を確定できる、というのが父の方法論なのだろう。地質学的な年代測定が歴史学的な年代測定によって補強された形だ。歴史書に記された黄巾の乱と、自然史に残された大規模自然現象・異常気象の関係とが対応し合うのである。

父はさらに少し冒険して、年代の比定が難しいとされる『日本書紀』について、中国の

史書との対応を調べてみたようだ。『三国志』の記述から「2世紀後半」と推定され、『後漢書』では「桓帝・靈帝の間」（西暦146～189年）とされる「倭国大乱」を、『日本書紀』のなかに探す作業である。

それは次のようなものだ。

まず、『日本書紀』における異常気象記述には、宣化天皇元年（西暦536年）の記事がある。これはインドネシア・クラカタウ火山の大噴火（535年）によるものだということができる。世界各地に異常気象をもたらしたこの噴火は有名で、この規模の異常気象の記録を歴史書に残すということでは『日本書紀』もその例外ではない。また、この時期の『日本書紀』の年代は、西暦と齟齬なく比定できるということだ。

このように考え、異常気象やそれによる飢饉に注目して『日本書紀』を探してゆくと、崇神天皇紀5・6年に疾病と流民発生の記事が見つかり、同紀12年には「寒さ暑さ序を失えり。疾病多に起こりて、百姓災を蒙る」という天皇自身による回顧が見つかる。

宣化元年＝クラカタウ火山噴火の記述以前に、同様の異常気象・疾病の記述が見当たらないことから、この崇神紀5年を、黄巾の乱が起こった中国の光和5年に比定させるというのが父の提案である。

つまり、184年の黄巾の乱を引き起こした181年のタウポ火山の噴火は、同様に、「桓帝・靈帝の間」（146～189年）とされる「倭国大乱」を引き起こした。これまで中国史書でいう「倭国大乱」に直接対応する記述を『日本書紀』に見つけられないでいたが（皇位継承をめぐる紛争などは散見される）、異常気象に関する記述を媒介にすれば、これを崇神天皇期のことと推定できるというのである。つまり、黄巾の乱と同じ時期の「倭国大乱」も異常気象に関係するのであれば、『日本書紀』の異常気象記述を探せばよい、ということである。

これが自然地理学の知識を背景にした父の「説」である。

ちなみに、崇神天皇は「神」が付く天皇なので、歴史上特別な意義を持った天皇であることは間違いない。調べてみると、崇神天皇の時代が戦乱の時代であることは『日本書紀』に記されており、崇神天皇の娘と孫娘（倭姫命）が、伊勢神宮の創建神話とも関わる巫女的な女性たちであるというのも興味深い。もちろん卑弥呼が（彼女らではなく）神功皇后に推定されているのも有名な話であるが……。

ただ、このあたりから先は、父のほかの「説」との絡みあいが、論争的で巨大な彼の古代史の姿を作り上げてゆくので、素人には追尾が難しい。（古代の地図作成・測量技術についての議論も興味深いのだが）が、地質学的な測定技術の進展が、歴史の論争に一案を投ずるとするのは、鮮やかであった。

先にも述べたように、この話が興味深いのは、たんに技術の進展によって歴史の年代が決定されてしまうのではなくて、なお数年の誤差を含む測定が、逆に歴史書の読み込みによって確定されていく様子である。ここまで熱心に中国の史書や『日本書紀』を読んだ自然地理学者もいなかったのではないか。

歴史の史料、出来事に直接関わった当事者による一次史料というのは、体験者・経験者が死んだ後は量的に増えようがない。ましてや古代史の世界では、極めて限定された数の史料をめぐって、人々が様々な「解釈」により論争を繰り広げている。史料の記述の空白、史書の記述の中にある矛盾、あるいはまた、それぞれの史書の記述のあいだにある矛盾を整合させようとして、かなり突飛な解釈（というか、諸矛盾を整合させるように見えるが確かめようのない解釈）が一流の学者によって述べられているような世界なのだ。

こうした様子は、豊富にある史料をいかに捌いてゆくかという現代史とは大分違うが、大きな目で見れば、当事者が死して後は史料が増えないということは、歴史認識という営みにおける本質である。確定出来ない事実に対し、史料という証拠は増えず、どうしても埋められない場合、「解釈」だけが増大してゆくということである。

そんなとき、測定技術の発展がもたらす自然史的なデータは明らかに新しい歴史資料である。「増える」可能性のある資料だ。それは、私たちの日々の営みや歴史が自然の中にある、というアイデアによってもたらされるわけである。

・文献

野上道男「2世紀末タウポ火山大噴火による冷夏凶作と倭国乱」『日本地理学会発表要旨集』（春季）2014年